

Title	<書評> 宮崎市定著『中国史』 上
Author(s)	勝藤, 猛
Citation	大阪外国語大学学報. 74(3) p.119-p.131
Issue Date	1987-11-30
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/81167">https://hdl.handle.net/11094/81167</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 書 評

## 宮崎市定著『中国史』上

勝 藤 猛

Miyazaki Ichisada, *Chugokushi* (The History of China), Part I

Takeshi KATSUFUJI

### ま え が き

大阪外国語大学の一般教育科目の東洋史学の教科書として、ここ数年来、宮崎市定『中国史』（岩波全書、上1977年、下78年、初版）を使っている。ある年に上、次の年に下という風に読んでいる。高等学校の世界史として、全地域の全時代にわたって学習した後を受けて、特定地域の連続した文明を通史的に考察することが、この授業の目的である。そして本書に見出したいくつかの問題を論ずるのが、書評、あるいは研究ノートたる拙稿の目的である。

地域として、その文明の世界史的価値から見ても、わが国との関係から考えても、中国を選ぶ。なお本稿でいう中国とは China Proper を指す。東洋史を専攻しない学生のためには、内容が簡潔であることが望ましい。したがって1年間に中国史の半分は程よい量である。また一人による著作の方がよい。複数の執筆によるものは、史観が表れず、叙述が詳細に過ぎることが多い。著者一人の場合は、史観が透徹していてわかりやすい。この場合、偏見は免れがたいが、それを批判することも学習の一部をなす。

参考書として、桑原隲蔵『中等東洋史』1898年と、同『東洋史教授資料』1914年（ともに桑原隲蔵全集、岩波書店、1968年、第4巻に所収）がよい。これらには宮崎が解説を書いている。本稿の体裁は、桑原『資料』にならい、項目に分けることにする。この方法は重要な問題を明快に説明するのに有効と思われるからである。

### 1. 日本と中国の関係

世界史における日本の位置については、ライシャワーがうまく表現している。

Geographic isolation and cultural and linguistic distinctiveness have made the Japanese highly self-conscious and acutely aware of their differences from others. In a way, this has been a great asset to them in the modern age of nation-states, for they have faced no

problem of national identity. (Edwin O. Reischauer, *Japan The Story of a Nation*, Tokyo, 1974, p.8.)

また日本と中国との歴史的関係についても、同じ著書の次の箇所が参照に値いする。

The Japanese lived across the sea from China, were never conquered by Chinese armies, diverged sharply from Chinese political and social patterns, were an extraordinarily homogeneous people. (*ibid*, p.108.)

日本文化が中国の影響から脱して独立していく過程は、内藤湖南「日本文化とは何ぞや」1922年（『日本文化史研究』所収、内藤湖南全集、筑摩書房、第9巻）

## 2. 中国地理の要点

中国の河川は多く西から東へ流れる。その主なものは北から南へ、白河・黄河・淮水・揚子江・钱塘江である。これらを南北に縦貫して水路を結合するのが大運河である。

中国の地理は、淮水（または淮河、北緯33度）を境にして、南北に分かれる〔本書243頁、以下、本書の頁数は角カッコで示す。302頁までが上、以下が下である〕。

交通手段	衣	主食	住	年降水量 (ミリ) 間量
馬	絹・麻・棉	コムギ・キビ・ コウリヤン・マメ	煉瓦（焼成・ 日干）・石	約500 (北京)
船	同上	コメ	木	約1,000 (上海)

→ 淮水

## 3. 中国の開国伝説

桑原『東洋史』にいう。伝説に拠るに、太古の時、燧人氏ありて、始めて火食を伝え、伏羲氏ありて、始めて八卦を画し、また網罟を結びて佃漁を教え、神農氏出でて、稼穡の法を授け、また交易の道を開くと。これすなわち後世いわゆる三皇なり。その後、大よそ紀元前2460年の頃に当りて、黄帝出でしが、英資大略ありて、天下を統一せんと欲し、しきりに四方の諸侯を征して領土を開き、東は海より、西は今の甘粛の西部に至り、南は揚子江より、北は今の直隸〔河北〕・山西の北部に達する、一大帝国を建設せり。

開国伝説は、ある民族が自分の先祖について真実と信じていた物語であるから、歴史叙述に必須のものである。中国の三皇の一人は現在の日本にも生きている。

山本健吉編『新俳句歳時記』冬の部、光文社、1956年、「神農祭」の項にいう。11月22・23日、大阪市東区道修町〔どしょうまち〕の、俗に神農さんと言われる少彦名神社の祭である。神農は三皇の一である炎帝で、人身牛首、天下に耕を教え、百草を嘗めて医薬を創製したという、中国

の神話的人物である。・・・少彦名も日本の葉の神としている。・・・

東京都文京区の湯島聖堂の境内に祠堂があり、木製の神農像を祭っており、毎年10月に神農祭が行われる。

参考：桑原『資料』，2「三皇五帝の名称」

#### 4. 封建制と郡県制

現在「封建制」の語は、西洋の feudalism の訳語として用いられるが、これは本来は古代中国に発生した制度であり用語である。文献では、春秋左氏伝、巻6、僖公24年（前637年）の条に「封建親戚，以藩屏周」とある。

宮崎『中国史』からの引用を〈 〉で示す。〈いわゆる周の武王による封建の説話も、そのままには受け取りかねる節がある。古伝によれば〔図式化して示す〕

武王の弟＝周公——魯      同じく召公——燕      同じく康叔——衛

武王の子＝成王の弟＝唐叔——唐，のち晋

西周最後の王＝幽王の叔父の子孫——鄭

私は、この系図は後から作られたもので、およそ東周の初めごろから、周本国と諸国との間の同盟関係を、親戚関係で表したものにほかならぬと考える。〉〔93—4頁〕

次に郡県制の発生について次のようにいう。〈〔戦国時代の諸国の〕領土内にかつて存在した都市国家は、いずれも独立を失い、その多くは、新興の経済都市とともに、県という行政区域の拠点とされた。県とは懸と同じく、中央にディペンドする都市の謂である。・・・この県をいくつかまとめて郡と称した。郡とは群の意味で、県をグループしたものにはほかならない。いわゆる郡県制度は、戦国時代に胚胎したのである。〉〔124頁〕

郡県制度は秦代に入って完成する。〈六国を平定した直後、〔秦の〕朝廷では、遠隔の地である燕・斉・楚の地方には、周にならって封建し、王を立てようという議が起こった時、これに反対したのが李斯である。もし今、近親を立てて王としても、数代の後には関係が疎遠となって、各自が自分の利益を追求するようになるから、ついには無窮の害を招くに至るだろう、というのが彼の反対の理由であった。〉〔148—9頁〕

史料：史記，6，秦始皇本紀      丞相〔王〕綰等言。「諸侯初破，燕・斉・荆〔楚〕地遠。不為置王，毋以填之。請立諸氏。唯上幸許。」始皇下其議於群臣。群臣皆以為便。廷尉李斯議曰。「周文・武所封，子弟同姓甚衆。然後屬疏遠，相攻撃如仇讎，諸侯更相誅伐，周天子弗能禁止。今海内賴陛下神靈，一統皆為郡県。諸子功臣，以公賦稅重賞賜之，甚足易制，天子無異意，則安寧之術也。置諸侯不便。」始皇曰。「・・・廷尉議是。」分天下以為三十六郡。郡置守・尉・監。

〈漢の高祖の天下統治の理想は、何よりも社会を安定せしむるにあった。そこでまず行ったのは、封建と郡県とを併せ用いるという、はなはだ姑息な政策であった。・・・異姓の諸侯が将

来禍根を残しはせぬかと恐れた。そこで功臣の大名を取りつぶすと、その跡へ高祖の一族を封じて王とした。……この漢の同姓封建制には、つねに中央の目が届いており、郡県制とあまり変らない性質のものであった。〕〔165—7頁〕

高祖が郡県制に近い政策を採用したことは、後世の政治家によって次のように評価されている。宮崎『東洋における素朴主義の民族と文明主義の社会』1940年（『アジア史論考』、朝日新聞社、上巻、所収）に、五胡の一、後趙の石勒についていう。自ら書を読まざるも、つねに儒生を侍らし、史を読ませてこれを聴いた。かつて漢書を読ませ、漢の高祖に、六国の後を立つべきを勧むる者ありというに至り、大いに驚いて曰く、「これ誤り。漢高祖にして天下を得たる」と。ついで張良が高祖を諫めて思いとどまらしめしを聴いて、掌をうって大笑した。

〈文帝の後に立った景帝の時、賈誼が憂慮したように、封建諸王の反乱が勃発した〔呉楚七国の乱。賈誼の新書に見える彼の憂患は、封建諸王の勢力があまりにも強大で、ややもすれば中央から離反する傾向のあることであった。172頁〕。その主謀者は呉王濞〔高祖の兄の子〕であって、諸王のうちもっとも年長者であった。その国は海に瀕して魚塩の利があり、また銅山を開発して富強となり、専恣の行いがあったので、朝廷はこれを抑えようとし、鼂錯の議を用いて、呉を始め諸王の領土を削ることを定めた。そこで呉王は、楚王ら六国を語らい、鼂錯が一族を離反せしめるの罪を鳴らして兵を挙げた。景帝は驚いて、不覚にも鼂錯を斬って七国をなだめようとしたが、かえって呉王らはいよいよ勢いづき、洛陽の近くまで攻めこんできた。まさに鼂錯が言ったように、諸王は驕横となっており、削るも亦た反し、削らざるも亦た反す、という言葉が当たっていたのである。〕〔174頁〕

史料：史記、106、呉王濞列伝　　乃益驕溢，即山鑄錢，煮海水為塩，誘天下亡人，謀作乱。今削之亦反，不削之亦反。削之，其反亟，禍小。不削，反遲，禍大。

〔〔明代〕齊泰らは建文帝に勧めて、削るも亦た反し、削らざるも亦た反すという鼂錯の理論を実行しようとした。……太祖には皇子が26人あり、皇太子を除いて他の25人を各地に封じて王とし、これに兵権を委ね、3千人ないし2万人の軍隊を直属の部下として与えた。この中で、万里の長城の内外に並行して配置されたいわゆる塞王たちがもっとも強力であり、中でもとくにぬきん出たのが、北平、すなわち元の大都〔今の北京〕に封ぜられた燕王＝朱棣であり、これは太祖の第4子で、その人物も傑出し、その兵力も強大であった。したがって建文政府が目標に定めたのも、この燕王にほかならなかった。〕〔下454—5頁〕

〔〔清朝〕康熙帝はまず三藩の撤去に乗り出した。このような異分子を残存させては、真の統一と言えぬからである。こういう際にいつも引き合いに出されるのは、前漢の鼂錯の言葉、削るも亦た反し、削らざるも亦た反す、という理論である。〕〔508—9頁〕

中国数千年の歴史を通じてつねに、郡県制＝中央集権制というたてまえと、封建制＝分権制という現実とが、存在していた。

## 5. 集落の構造と発展

集落に関する語彙を本書から紹介する。

國〔国、くに〕を構成する要素：口＝城郭，戈＝武器・主権，人＝人民，土＝土地。

参考：宮崎『素朴主義』

城：都市国家周囲の牆壁。周囲900メートル，人口3,000戸＝15,000人。現代語で「まち」の意。

日本の都市には牆壁はなく，城は町の中心にある武士の戦闘の場であった。

郭：城の外に住む人民を守る牆壁，のち城よりも郭が強化され，郭が防衛線となった。

街：城郭の中の通路の大きなもの。

衢：街から分かれる枝道。

里：街衢によって囲まれた一地区。

牆：里の周囲の土塼。現代語では「壁，塼」，木造家屋では壁はハンギング・ウォールであり，塼とは異質である。参考：中尾佐助『秘境ブータン』毎日新聞社，1959年，社会思想社現代教養文庫。

閭：里の入口の門，里民が出入するにはここからし，牆を乗り越えてはならないとされた。

巷：閭から居民の門前に至る道路，その狭いものを陋巷という。

塾：閭の近くの空地，里巷の小児の遊び場。また閭の近くの集会所，子弟が学習する処。

史料：礼記，学記18，「古之教者，家有塾，党有庠」塾は現代日本で盛況である。

〔以上，98—101頁〕

集落の発展については，総論の中に有益な記述があるので引用する。

1，古代のいわゆる都市国家の実体は，農民の集中した城郭都市であることを原則とした。私が中国古代において見るところも，このような“農業都市国家”にほかならない。……周囲に城郭をめぐるして，人民がその中に住み，耕地は城郭の外にあって，農民は毎日城郭を出て，耕地へ出て働き，夕暮には城郭内の住家に帰る〔38頁〕。農民が朝起きて畑に行くさまは，時代は下るが，北宋の秦觀の「田居四首」に描かれている。参考：吉川幸次郎『宋詩概説』岩波書店，1962年。

2，中世の中国経済は，莊園によって代表されるように，できるだけ自給自足を計る，自然物経済を指向した経済であった。農業生産は都市を離れて郊外の田園村落に移ったため，あとに残った都市は“政治都市”となり，官吏や軍隊の居住地となった。〔68—9頁〕

3，この情勢が唐末から変化を見せはじめ，宋に至ってすっかり面目を一新した。それは中国内部において資源の開発が進み，各地に特殊の産物が発達して，地域的な分業がおこり，このことは不可避免的に流通経済を促進する。……政治的な役目を主な目的として存在した都市は，再びその経済的使命を見直され，“商業都市”として発展しだした。〔69頁〕

産業革命のなかった中国では，“工業都市”は発生しなかった。

## 6. 諸 子 百 家

春秋・戦国時代は中国史上、特異な時代である。なぜなら、秦帝国成立から現在の中華人民共和国に至るまで、言論の自由が十分でなかったのに反し、かの時代は、統一政権がなかったために、言論の自由、したがって思想の発展が見られたからである。その思想は中国や日本において、後世に甚大な影響を与えた。かの時期のことで日本語の諺になっているものの、いかに多いことか。

〈政治機構の整備が各国において政治上の急務となると、人材が要求される。とくに官僚陣の充実が必要になってきた。この社会的要求に応じて人材の教育に当たったのが孔子である。……彼は実用の学を教えるとともに、人生の理想を説いた。……その言行録たる論語において、孔子がもっとも力説したのは信であった。信は、一般的人間生活、とくに都市国家における市民間の信頼感であって、まさに社会道德の根幹たるべきものであった。〉〔109—12頁〕

史料：論語、道千乗之国、敬事而信。（学而） 人而無信，不知其可也。（為政） 民無信不立。（顔淵）

春秋時代、〈各国の王は争って、政治理論に通達した学者を招聘して、治政の参考にしたいと考えた。この結果、朝廷が一種の社交場となり、内外の学者が集まってきて、互いに議論を闘わせ、おのおのその道を世に広めようと競い合った。諸子百家と呼ばれるのが、これらの学者たちの総称である。〉〔128—9頁〕

〈墨子によれば、儒教が主張する仁は、差別愛にほかならず、……自他を区別せず、同等に兼愛するのが最高の理想でなければならぬ。〉〔129頁〕

〈墨子の学説が中国におけるストア学派なら、エピキュルス学派ともいうべき楊朱の唱える自愛説が一方に行われた。〉〔130頁〕

〈孟子は、墨家の学は孔子の儒教に及ばず、彼の兼愛と称する無差別愛も、かえって親に孝を尽すという自然の愛情を損う結果を招くとして反対した。〉〔130—1頁〕

〈老子の学は個人主義の主張で、楊朱の系列に属するが、楊朱のような快楽主義でなく、快楽を超越すべきことを説く。同時に、儒教が尊重する礼制をも超越して、精神の自由を獲得するのを理想とした。〉〔132頁〕

〈儒教の中においても、種々の学派に細分化した。戦国の終りに近づいたころ、荀子が現れ、孟子の楽観的な性善説に反対を唱え、性悪説を主張した。〉〔133頁〕

〈荀子の門から、李斯・韓非子のような法律専門家が現れて、法家の学を唱えた。〉〔134頁〕

以上のように、一つの問題について、それを両面から見る立場が共存しえたことが、きわめて重要なことである。統一政権ができると、一面的な意見しか公認されなくなる。

なお、中国や日本における宗教の在り方は、西方のそれ、即ちユダヤ教・キリスト教・イスラム教におけるのと、大いに相違する。ラティモアは、新疆省に住む漢人——その母がイスラム教

徒であるのを除き——について、次のように記している。

The Chinese of Sinkiang, ...two thirds of whom live within that vague association of Confucian, Buddhist, and Taoist ethical maxims and ceremonial observances which satisfies the need for religion in the lives of most Chinese. (Owen Lattimore, *Pivot of Asia*, Boston, 1950, p.119.)

## 7. 「中国」の拡大

桑原『資料』, 20「中国という語の起源および意義」にいう。漢族の占領せし土地を汎称して中国という。彼らが自ら与えし名称にて、天下の中央に在りと信ぜしによる。……もちろん漢族のしだいに膨脹するとともに、中国という名称の内容もまた膨脹し、支那本部 (China Proper) を指し、また支那全体 [1914年現在] をも指すに至れり。

〈春秋時代の歴史事実は、中国文化の拡大普及と、これに対する反動として異民族が民族的に自覚し、強力な国家を建設した点に意義がある。いわゆる春秋の五覇は、いずれも周の民族とは異なった別種の民族と思われる。〉 [116頁]

秦の始皇帝の領土は、36郡、プラス南海・桂林・象郡・閩中の4郡、合計40郡で、これがだいたい後世の中国本部18省に相当する。 [150—1頁]

後世になっても、中国の語は黄河中流域に限られていたようで、三国時代に、呉は北方の魏を中国と呼んでいた。史料：資治通鑑, 65, 赤壁の戦いの条 以呉越之衆, 与中国抗衡。驅中国士衆, 遠涉江湖之間。

## 8. 縦横家——情報時代の幕開き

〈縦横家の学説は……弁論の前に、数理的な立場からする現状の分析があった。その情勢に対する的確な把握の上に立ち、客観的な平衡感覚によって、緻密で大胆な判断を下すから、その弁論に説得力があるわけである。しかしこれも優秀な政治家は昔から、別にそれと言挙げしなくても、実際にやってきたことであるが、縦横家の出現によって、その秘密を公の場面に引き出し、一家の学問として練習することを可能ならしめたのである。〉 [137頁]

注：「言挙げ」, 万葉集, 巻6, 972。

蘇秦を例にとると、彼は秦を皮切りに、趙・燕・韓・魏・斉・楚の7国を訪問した。秦では「方誅商鞅 [衛の出身、秦の政治家, 142頁], 疾弁士弗用」という理由で、相手にされなかった。しかし他の6国では、彼の弁舌は成果を挙げ、「六国従合, 而并力焉。蘇秦為従約長, 并相六国」となった。彼の政治論の特色は、その国の面積・地形、他国との関係、兵士や戦車の数、食料の量、およびその国の特産品や特色を、具体的なデータをもって説明するところにある。印象だけに頼



らず、数字を挙げるあたり、今日からみても科学的である。〈優秀な政治家は実際にやってきた〉ことは、蘇秦が趙王に「明主，外料其敵之彊弱，内度其士卒賢不肖。不待兩軍相当，而勝敗存亡之機，固已形於胸中矣」と言っているとおりである。話し相手である王にとって十分にわかっていることでも、それを確認させるためか、自分の情報をひけらかすためか、その国の情勢を詳述している。どの国へ行っても同じ形式の弁論である。それが戦国諸国概説の史料にもなっている。蘇秦は弱国である韓に対しては、秦に屈しないよう気合いを入れるために、当時の鄙諺「寧為鵝口，無為牛後」を言うと、この精神論はたちまち効き目を表し、「於是韓王，勃然作色，攘臂瞋目，按劍仰天，太息曰，寡人雖不肖，必不能事秦」となった。この六国連合も秦の各個撃破工作によって崩壊する。蘇秦の立場は危うくなり、各国を転々としたあげく、斉で暗殺された。彼は政治家でなく、評論家であった。

史料：史記，69，蘇秦列伝。70，張儀列伝。 参考：貝塚茂樹『史記』中公新書，1963年。

## 9. 漢字の利点

〈戦国の間に各国で文字の書体が区々に変化発達したので、秦の始皇帝は李斯らに命じて校訂せしめた蒼頡篇の書体に統一させた。〉〔151頁〕 参考：桑原『資料』，44「大篆と小篆と」，45「篆隸の製作者および楷行草三体の起源」，46「六書」

〈中国の漢字が印刷に不便であることは、しばしば唱えられてきた。しかしながら、中国の領土が広く、方言の差違が大ききことを考慮に入れると、この説はそのままには受け取れない。現今でも、北京語は、上海まで来ると、もう一般人には理解できない。……もし中国に漢字がなく、ローマ字のようなアルファベットを用いていたとすると、北京で発行した書物は、上海や広東では読まれにくい。……ところが漢字の利点は、発音に拘束されることなく、字形の視覚で通用するにある。同一の文字を、北京人は北京語で読み、広東人は広東語で読む。いな日本人はそれを日本語で読んで、結構意味が通ずるのである。〉〔下319—20頁〕

参考：ブルームフィールド著，三宅鴻・日野資純訳『言語』大修館書店，1962年，381頁 (Leonard Bloomfield, *Language*, New York, 1933, London, 1935.)

シナ語の書記に見られるような表語的体系は、その言語の一つ一つの単語に対して、一つずつの記号を覚えなければならないという不便がある。シナ語の書記に用いられる複合記号は、すべて214の成分\* (“radicals” 「字根」) に分析されうが、それでも読み書きを習う労力は莫大なものである。他方、この体系は、その記号が単語の音声的なかたち phonetic shape について何も告げない non-committal\*\* という大きな利点をもつ。シナ人は互に通じない幾つもの

\* 訳者註 『康熙字典』総目の部首の数が214である。この数をさしたものであろう。

\*\* 筆者註 この引用部分の前にいう。「シナの書記では、音符 phonetic と分類符 classifiers とが、一個の複合文字に統合されている。しかし音符は、必ずしも精確にはその単語の音を表わさない。」形符と音符から成る形成字（六書の一）を指すのであろう。

方言を話すが、書記と印刷においては、辞彙と語順についてのある習慣を守り、それによってたがいの書記物を読むことができるし、またある程度訓練を積みれば、その古代文学\*\*\*の書記物をも読むことができる。

## 10. 革 命 運 動

黒田寿郎『イスラームの心』中公新書、1980年は、イラン・イスラム革命を礼賛した本である。この中で、フランス革命のスローガン「自由・平等・博愛」が、7世紀のアラビアにおいて、すでにマホメットによって唱えられていたことが記述されている。もし古さを競うなら、中国は他の地域に断然まさる。前209年、陳勝・呉広は秦の二世皇帝政権に対して反乱を起こすに際して、「王侯将相、寧有種乎」と部下に言って、人間の平等を鼓吹した。ただそのとき人々を煽動するためにインチキな計略を用いたのは、革命運動の裏話としておもしろい。また後漢の五斗米道教団は〈道中に義舎という宿泊設備を建てさせ、その中に義米肉をおいて、旅人が必要なだけ使用することを許したという。〉〔212頁〕「義」は charity の意である。「自由・平等・博愛」は、あらゆる革命運動が掲げて、しかも達成されないスローガンである。

## 11. 暦

〈年号を創始した〔漢の〕武帝は、さらに進んで暦を制定して、太初暦と名づけた。太初はその時の年号である。これは今日の分類でいえば太陰太陽暦であり、月の運行をもととした太陰暦と、太陽の運行に基づいた太陽暦を合体したものである。・・・この暦を毎年作りかえるのが皇帝の特権となり、皇帝の下した暦を用いるのが、皇帝の主権を認めて臣下となった証拠となり、これを「正朔を奉ずる」と言うようになった。〉〔178—9頁〕

ペルシア語史料に、君主のことを「時間と空間の支配者」と形容している。空間とは領土であり、時間を支配するとは暦を作ることを指すのであろう。

日本は独自の暦をもつことなく、中国、ついで西洋の正朔を奉じて今日に至っている。

中国は次の2種の暦をもつ。

### ○太陰太陽暦

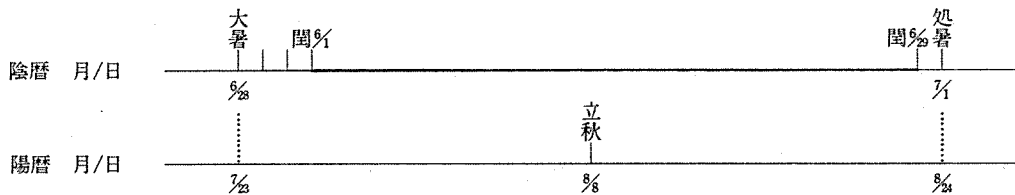
陰暦 1 か月 (1 朔望月) $\approx 29.5$ 日	1 か月の中の日は月の満ち欠けによる
1 年の日数は、 $30 \times 6 + 29 \times 6 = 354$ 日	1 太陽年 365.24 日より 11 日すくない
19 年間に 7 か月を閏月として加えると、月が季節とずれない	
$12 \times 19 + 7 = 235$	19 年間の月の数
$29.5 \times 235 = 365.24 \times 19$	19 年間の太陰暦の日数と太陽暦の日数が等しくなる

\*\*\* 筆者註 「文学」 literature はここでは「文献」とする方がよい。

## ○太陽暦たる二十四節気

1 太陽年を24等分し、現行暦2月4日を「立春」とし、約15日ごとに分けて「大寒」（1月20日）に至る。「立春」を節気、「雨水」（2月19日）を中気というように、交互に節気と中気に分ける。約束として、「雨水」に始まる12の中気は、上記の太陰太陽暦の、それぞれ1月から12月の中になければならぬとする。1 朔望月が29.5日であるのに対し、中気と中気の間隔は30.4日で、約1日の差がある。したがって2、3年たてば、中気が所定の月からはみ出す。そのところで閏月を挿入して元に戻す。

日本の旧暦も原理は中国暦と同じ。昭和62年の閏月を下に示す。



「大暑」「処暑」は、それぞれ中気の6・7番目であるから、陰暦の6・7月中になければならない。もし閏6月を挿入しないと、「処暑」は8月に入ってしまう。

イスラム暦は純太陰暦で、宗教行事はこれによる。他方、農業・遊牧には太陽暦を用いる。イラン文明圏には、春分を元日とする太陽暦が古くからある。現在でも農作業の期日は、春分と秋分を起点とする日数で表す。

参考：薮内清『歴史はいつ始まったか』中公新書、1980年。

## 12. 漢の武帝の妻たち

〈武帝は匈奴遠征軍の将軍に、青年を選抜して当たさせた。……自己のごく親しい側近の中から人才を選んで、天子の私人という権威によって大将に任じたのである。すなわち衛青は衛皇后の同母弟であり、霍去病は衛皇后の姉の子であり、李広利は武帝の寵を受けた李夫人の兄であった。この三人はいずれも身分の賤しい出身であるが、それだけ天子に近づくことができ、大将に任ぜられると、それぞれ委任に背かない軍功を立てた。……この三大将の選任につき、清の趙翼は、その『廿二史劄記』において、武帝の三大将はみな女寵に由ることを指摘し、非難がましい口調を用い、しかも彼らが大功を立てたのは理の解すべからざるものと不思議がっているのも面白い。〉〔180—1頁〕 参考：『劄記』、2、「武帝三大将、皆由女寵」

1, 陳皇后 武帝の父＝景帝の姉＝嫫と、その夫＝陳午（項羽の同志で後に劉邦に仕えた陳嬰の孫）の間の娘、名は嬌。子なく、帝の愛を失い、皇后の位を退き、失意のうちに死す。武帝にとってこの妻は cross-cousin である。未開社会におけると同じく、中国でもこの種の結婚は是認された。これに対し parallel-cousin 間の結婚は、中国でも同姓間のそれとして忌避された。

2, 衛皇后 名は子夫, 父は不明, 衛は母の姓。謳者 (コーラス・ガール) をしていたとき, 武帝の愛を得, 男子 (皇太子) を生み, 皇后となる。父系社会では妻の出自は問題にならない。50年のち, 武帝の怒りに遭い, 子とともに殺さる。この皇太子だった人の孫が第7代=宣帝となった [188頁]。

3, 李夫人 兄=延年とともに歌舞をもって武帝に仕える。1子を生んだが, 若くして病死。

4, 趙氏 位階は婕妤, 微賤の出, 修験者の推薦による。武帝最後の妻で, 63歳の彼の子を生んだ。これが第6代=昭帝であるが, 武帝はその母を殺した。この事件についての記事:

宮中の牢獄へと引き立てられてゆく趙氏は, 何度も皇帝の方をふりかえり, 必死の哀願のまなざしを向けた。武帝はいった, —— さっさと行け, おまえは生かしておけないのだ。刑死の時には, 大風が吹きつづけた。数日ののち, 武帝は側近にたずねた。—— おまえ達は, どう思う。—— お気に入りのお子さまの母親をお捨てになるのは, どういうわけでございますか。—— おまえ達にはわからない。おさない天子のうしろにいる若い母親は, きっと国家をあやまる。以上は褚少孫の史記補の記すところである。漢書には, そこまでの記載はない。何にしても, この話は私をして, 武帝に対するはげしい嫌悪を感じさせる。(吉川幸次郎『漢の武帝』岩波新書, 1949年)

〈武帝はその長い治世を終るに当たって, 自ら死期を予知し, 子の昭帝に位を伝えることを決心すると, その母の趙氏が罪もないのに死を賜った。信頼関係に甘えて, 呂氏事件 [高祖の妻=呂後の悪業, 171頁] の二の舞いに陥るのを予防したのである。〉 [187頁]

### 13. 宦 官

英語による宦官の定義: eunuch Castrated male person esp. one employed in harem or (in Oriental courts & under Roman empire) in State affairs. (*Pocket Oxford Dictionary*)

桑原『資料』, 54「宦官の起源および沿革」にいう。宦官は支那に限りしにはあらで, 欧州の古代にも, 現時の西方アジアにも存するものにて, 日本のごとく古来まったく宦官を有せざる国は, むしろ稀有に属するなり。もちろん宦官の跋扈は支那を第一とすべし。

本書中の宦官の記事を以下に列挙する。○印の箇所がその弊を強調している。

秦の趙高。[156, 159頁]

前漢, 元帝の代, 宦官と大臣の確執。[189頁]

後漢における宦官の陰謀と外戚の専権, 〈中国史上, 宦官の横暴は, 後に唐・明二代が甚だしいと称せられるが, 後漢がその先蹤を示したものである。〉 [203—214頁]

唐代における宦官の弊 [287—290頁]

○北宋の宰相=蔡京と宦官=童貫の同盟について, 〈天子の側近たる宦官を味方にするのが, 外廷の大臣にとってはもっとも有効な地位保全策であつた。しかしこれより以前の官界においては,

大臣がそのような卑怯な手段に出れば、たちまちそれが評判となって、官界から非難を受け、かって自身の立場を損う結果ともなりかねない。ところが蔡京はあえて大胆に公然と宦官と握手してはばからなかった。〔下357頁〕〈監軍という肩書をもった宦官＝童貫は、戦功を立てると、もはや宦官としてでなく、表向きの大臣の位を得て、軍隊の指揮ができるようになった。〉〔365頁〕

南宋の宰相＝賈似道は〈権術を用いて宦官の専横を抑え、宮中までにらみを利かせて、その妄動を許さなかった。〉〔406—7頁〕

明の永楽帝の治世、宦官＝鄭和による大航海。〔462頁〕

○〈漢・唐に比較すると、明代の宦官は天子の信任を得てはじめて専横を行うのであって、いったん天子の寵を失えば、たちまちその地位ばかりか、生命までも保ち難くなる。〉〔471頁〕〈宦官はほとんどすべてが下層社会の出身であるだけ、世故にたけ、実務の才に長じている。彼らはいわば廉恥の外におかれた利益追求者の集団で、あらゆる知恵をしぼって、その地位を利用して賄賂を食うのを心がける。〉〔472頁〕

宦官＝魏忠賢一派と東林派の対立。〔494—6頁〕

明の滅亡の過程、李自成のために宦官＝曹化淳が北京の城門を開いて降伏、莊烈帝の自殺、宦官一人殉死。〔501—2頁〕

#### 14. 土地所有形態

漢書食貨志に董仲舒の言として、「富者田連阡陌，貧者亡立錫之地」という。これは秦代のことを述べたものである。秦以前といえば、三代、つまり理想の時代であって、事実とは認めにくい。即ち中国では、歴史時代に入ると、すでに貧富の差ができていた。

時代が宋代に下ると、ある文献には「貧民無立錫之地，而富者田連阡陌」と、先のとほとんど同じ文句が見られる。さらに明末については、天下郡国利病書に「今之富家，或田連阡陌，或貲累鉅万。較之小民，豈止十倍」とある。この中の第3句は、やはり漢書食貨志に「庶人之富者，累鉅万」というのと似ている。「連（開）阡陌」の解釈には諸説あるが、ここでは簡単に大土地所有のこととしておく。

宮崎「部曲から佃戸へ」1971年（『アジア史論考』中、所収）にいう。

中国社会は、一部学者の考えるほど凝固したものでなく、貧富の階級は判然と分かれておりながら、その間に人的交流が行われ、たえず構成員が入れ替わっていたこと、いわゆるモビリティが相当広汎に行われていたのではないかと考えられる。六朝ないし唐の中世的貴族社会においては、貴族の生命はすこぶる長く、王朝の興亡に関係なく、その社会的地位を維持していた。しかるに宋代以後は、王朝の命脈がはなはだ長いのに反比例して、貴族・官僚・富豪の家はあまり永続しないで、勢力の交替が頻繁に行われる。最下層から立身して、最上層に昇ることも

不可能ではなかった。……宋代以後しきりに用いられるようになった形勢戸の形勢とは、成り金という響きをもった言葉であって、門閥を誇る世家に対するものである。有為転変のはなはだしいのが近世社会の特徴で、それは決して封建という名で現わされるような固定したものではなかった。

参考： Whereas the power and privileges of the landowning class have been relatively constant over a long period, its composition has undergone many changes. From time to time it has incorporated new elements into its ranks and lost others. (Ann K.S. Lambton, *Landlord and Peasant in Persia*, Oxford Univ. Press, 1969, p.259.)

The landowner, although he enjoys comparative affluence, is in constant fear of being despoiled of his wealth by intrigue or of being cheated of it by a discontented peasantry. (*ibid*, p.394.)